

# コロナ後の強靱な社会をいかに構築するか？

ながれ

増井 利彦 (ますい としひこ/国立環境研究所 社会環境システム研究センター 室長)

今回の新型コロナウイルス感染症（コロナ問題）による緊急事態宣言の発令によって、多くの人に影響を受けた。筆者は自宅のある茨城県から出ない日が2ヶ月以上も続いており、連携先の東京工業大学でも新たに研究室に配属された学生とはパソコン画面を通じてしか会えず、また、留学生は来日すらできていないという状況が続く。我々がアジアの専門家を招へいして毎年つくばで行っている国際ワークショップも、秋の開催ではあるが、オンラインで実施することにした。今年4月にエクアドルで行われる予定であったIPCC第三作業部会の執筆者会合もはじめてオンラインで開催された。こうしたオンラインで会議が開催されることで、移動によるCO<sub>2</sub>や時間を節約できるとともに、いままで招へいできなかった方も一緒に参加できるようになるなどの利点を感じる一方、オンライン会議ではどうしても限られた時間での実施になるといった短所や、実際に会って議論することの大切さや価値も改めて感じるようになった。

筆者は、気候変動問題を中心に将来シナリオを分析することに取り組んでいる研究者だが、そこで対象とする将来像は良くも悪くも最終的なゴールに向かって連続的に変化していく。今回のコロナ問題のような突発的に生じた大きな社会の変化とそこからの回復は扱っていない。しかしながら、今回の出来事は、問題の原因から、今後の対応まで様々な示唆を我々に与えている。また、今回のような問題は、今後も形を変えて起こりうるし、さらに深刻な影響を及

ぼす可能性もある。

一方で、今からありとあらゆることを想定して対策を検討することは不可能である。それでは我々は無力かということ、そうでもない。そうした万が一の事態に備えて、方向性だけでも議論し、決めておくことは意味がある。問題の渦中にいると、どうしても目先の課題を優先しがちだが、大局的、長期的な立場に立ってに検討することも大切である。今回与えていただいた執筆の機会に、今後の社会について私見をまとめてみたい。

## 問題をどう防ぐか？

今回のコロナ問題のそもそもの発端は、野生生物に寄生していたウィルスがヒトに感染したことから始まったと言われている。つまり、これまで棲み分けられてきた野生生物の生息地域が開発によって縮小し、ヒトとの接触機会が増えたために生じた環境問題ともいえる。我々は、地球上に生息するすべての生物やウィルスを把握しているわけではなく、開発が更に進めば、今後もこうした問題は起こり得るだろう。無秩序な開発や自然破壊を抑えることで、同じような問題が発生する可能性を少しでも抑制できることを認識する必要がある。こうしたことは、気候変動問題も同様である。既に産業革命前から地球の平均気温は1℃上昇し、洪水などの被害が日常的に生じるようになっており、温室効果ガスの排出削減は急務である。問題を根本的に解決するために、何をすればいいかが問われている。

## 問題にどう対処すればいいか？

次に、問題が生じた場合にどのように対応すればよいであろうか？まずは、日常からの備えを十分にしておくことである。物資やインフラ、医療体制などハード面の確保はもちろんであるが、どのように行動すればいいのかソフト面の対策も重要であろう。誤った情報に惑わされることなく、1人1人が自らの意思で適切な行動を取ることができるように、正しい知識と想像力を養うことが大切である。今回も誤った情報に基づいて行動したために買い占めが起こり、本当に必要な方のところに物資が届かないということが生じていた。見えているところだけで判断するのではなく、見えないところも想像を働かせるということが必要であり、そうしたことを連想させる仕組み（情報の開示）も必要であろう。

被害が過ぎた後も、単純に元に戻すというのではなく、よりよい将来社会の実現に向けた取り組みを実施することが大切である。欧州では、コロナ問題の収束後の経済活動を見据えて「グリーン・リカバリー」をキーワードに復興を目指す動きが高まっている。残念ながら日本ではこうした動きは主流ではなく、現状の取り組みを見直すべき点はいくつもある。短期的に「環境か、経済か」という対立軸ではなく、長期を見据えて「環境も、経済も」という視点に立って解決方法を探る必要がある。これまでの経済効率性のみを重視する社会ではなく、強靱で様々な災害に対して強い社会を構築することが、長期的に見れば経済にも効果的となる。

グローバル化に関する議論もその1つである。経済的な効率性のみを追求すれば、他国で安価に生産したものを輸入するという選択肢も、今回のような状況では様々な弊害を生むことが明らかとなった。知識や

技術など、グローバル化が必要なものは多くあり、ナショナリズムによる不毛な対立は避けるべきだが、多様性を維持し、どのような国際関係を築くかといった新しい戦略を検討すべきであろう。

## 人とのつながりをどう維持するか？

今回のコロナ問題で一番難しいと感じたのはヒトとの距離であるが、他人との関係性まで距離をとることが求められているのではない。東日本大震災などを通じて、復興には人との関係が大切であることが再認識され、こうした点は今後も大きく変わらない。ただ、どのようにコミュニケーションを取るかその手段は大きく変わりうる。そのために、インターネットをはじめとするICT技術など新しい技術の役割は大切になる。今回、テレワークやオンラインでの飲み会を経験された方も多いと思うが、そうした新しいコミュニケーションの道具が利用可能になっていたのは幸いであった。地球という有限の中で、これからも活動し続けるためには、こうした新しい道具に慣れるしかなく、また、すべての人がこうしたコミュニケーションの道具を等しく利用できるようにする必要がある。

今回のコロナ問題は、世界中の人々に多くの犠牲を強いているが、それは我々が問題解決に向けた取り組みを先送りしてきたからともいえる。気候変動問題をはじめとした環境問題と、一極集中や格差など我々の社会が抱える様々な課題を同時に解決することが改めて求められていると言ってもよい。長期的な観点から、我々が向かっている社会は持続可能ではないことが明らかであり、大胆な方向転換が必要である。今回のコロナ問題は、改めて我々に合図を送ってくれているのかもしれない。